

G.hossei(和名無し*)は古くから知られている名前であるが、コレクション中では、種々のタイプが流通し、本当の G.hossei のイメージが如何なるものかを知る事は難しい。もう一度古い文献から出発して、文献に依拠して、現在の状況までの歴史を辿りながら、G.hossei について解説してみようと思う。難しい課題であり、また手に入る資料が限定されるので不完全なものになるかもしれないが、一度自分自身試みたいと思っていたので、あえて挑戦したいと思う。

*註) G.hossei は日本の文献では五大州となっているが、日本で流通している、いくつかのタイプの五大州はいずれも間違えて輸入された種に対して与えられた名前のように思われるので、本来の G.hossei に対しては、和名無しとする。例えば古曽部五大州は、以前碧巖玉 (G.hybopleurum) の一つのタイプとして流通していたが、現在の分類では G.catamarcense の類縁種であり、五十鈴園由来の五大州は G.mostii 系、正伝五大州は、G.catamarcense の類縁種と推定される。勿論、この推定はこれらの五大州が輸入球、又は、由来の分かった種子の子孫で、雑交配がされていなかったとした話である。外国でも、ベルガー(Berger) 氏の記載から、G.schickendantzii 系のもの、ウーリッヒ(Uhlig)が G. spec. L. Col (G. riojense) を、G.hossei として販売したことから、G. riojense 系のものが流通し、混乱しています。日本の五大州を初め、関連する写真は、主に本文の最後にまとめて示している。

さて本来の G.hossei に話題を移すと、文献では G.hossei (He. jr.) Berg. と記載されている場合が多く見受けられる。これは最初の学術記載が Haage. jr. により行われ、Berg. 氏により補充された事を示している。文献によれば、1926 年アルゼンチンのホセアス(Hosseus)教授が、ラ・リオハで、最初のこの種の植物を採取し、恐らくハーゲ商会に送った、それを 1927 年 Fr. Ad. Haage jr. 氏 (=Hge. jr.) が販売カタログで Echinocactus hossei として現地球の写真と一緒に載せた。そして 1929 年ドイツのベルガー(Alwin Berger)氏が本 “Kakteen” で Gymnocalycium として記載し、学術描写も行った。残念ながら、この本には写真が記載されていない。しかし、後の著者達の学術描写を見ると、ベルガー(Berger) 氏の記述を踏襲しているというか、そのまま書き写しているようにも思える。

此処に G.hossei に関する最初の詳しい描写が載っている、本 “Kakteen” からベルガー氏の学術描写を引用する。

“Echinocactus Hossei Fr. Ad. Haage jr. (1927) –Gymnocalycium Berger

幾分扁平な球形、暗い茶緑色、頭頂部で幾分窪んでいる、刺で覆われていない。長円の瘤を持つ稜は 13 個、幅が広く、横溝で、瘤隆起が形成されている。刺座の下でアゴ形状、側面で圧縮されて、前方に突き出している。刺座は 10mm から 14mm 互いに離れている。縦長で長さ 5mm から 6mm、幾分灰色の綿毛が付いている。刺は大抵 7 本、放射状に広がっている。そして幾分後方に曲がっている。頑丈で突き錐形状、あるいは幾分平坦。最初は茶色、後に灰色、先端は暗色。表面は荒れている。下の刺の対は長さ 15mm まで、最下部の刺は対をなさない、下方を指し、湾曲し、同じ長さ。花は頭頂部から、短い花筒部を持つ、切れ端状の、淡いバラ色を帯びた花卉を持つ。アルゼンチン、コルドバ

E.schickendantzii に類縁、Fr. Ad. Haage jr. 氏により輸入された “

ハーゲ(Haage)氏の家は古くからカクタスに関係していたので、Haage の名前がいくつか出てくる、ハント (D.Hunt) 博士の最近、出した本 New Cactus Lexicon (NCL と略記) に著者の略記表がある、Hge.=F.A.Haage、HgeF=F.Haage、HgeW=W.Haage、Hgef=Haage f.となっている。ベルガー氏の説明によれば、F. Ad. Haage 氏が輸入し、記載した事になっている。そして自生地はアルゼンチン・コルドバと記載されている。

しかし、プットナム(Putnam)氏の 1977 年の本 “Gymnocalycium” によると、G.hossei (*Haage jr.*) *Berg.*と記載されている。この Haage jr.が誰なのかは良くわからないが、プットナム氏が以下のように記述している。“最初の植物は、アルゼンチン、ラ・リオハでホセアス(Hosseus)教授により採取され後に、Walther Haage 氏により学術記載された。Walther Haage 氏は、かなり最近になって、最初の輸入植物の一つの写真と一緒に論評を発表した。(Nat. Cact. & Succ. Journal 26, 4, 104, 1971) ハーゲ氏に拠ると、本当の G.hossei は茶ピンク色の刺で、刺座に長さ 26mm に到達する中刺を含め 7 本、表皮は鈍い(艶消し)灰緑色、花はピンク色。バツケバーク氏の Die Cactaceae III に載せられた図 1669 の G.hossei は全く異なる種である。” と記載されている。



Putnam、Gymnocalycium の G.hossei

ここで、2 つの文献からの情報を比較してみると、幾つかの相違点がある。産地(自生地) に関してはベルガー氏が間違っただけで、ラ・リオハが正しいと思われる。初記載年は 1927 年かもしれないが、まだ良く分からない

記載者が人によって異なる。ベルガー氏は F. A. Haage 氏としているが、プットナム氏は Walther Haage 氏としている。恐らく古い文献の Berger 氏による F. Ad. Haage jr.が正しいと思われる。プットナム氏は、後の文献を考えていたのかもしれない。

表皮の色は暗い茶緑色と鈍い灰緑色の違いはある。個体差の範囲かどうかは判断が難しい。中刺については、ベルガー氏は記載していないが刺の数は 7 本と記載している、ハーゲ氏は長さ 26mm に達する中刺を含めて 7 本の刺としている。花の色は淡いピンクとピンク色の違いはあるが、個体差の範囲かもしれない。刺の色が茶色と茶ピンク色の違いはあるが、個体差の範囲かもしれない。

上で挙げられた Walther Haage 氏の文献が手元に無いので、最初にハーゲに輸入された植物がどのようなものかは良く分からない。しかしハーゲの現在のカタログには、最初の個体が存在しているような記事が見られる。

プットナム氏以前の重要な文献は、バツケバーク氏(Curt Backeberg)の 1956 年の “Die Cactaceae III” と 1966 年の “Cactus Lexicon” である。この二つの文献でも G.hossei は独立した種として取り上げられているし、G.hossei とされた植物の写真も載せられている。2 つの文献の学術描写は基本的に同じで、ベルガー氏の物をそのまま踏襲している。

Die Cactaceae III では、解説が加わっている。産地に関しては、ホセアス(Hosseus)氏はラ・リオハ、ベルガー氏はコルドバと二つとも採用している。興味深い解説は、当時のギムノカリキユームの専門的な収集家ボッシング(F.Bozsing)氏の見解を載せている。彼の見解では、非常に変化に富む植物で、

この名前でコレクションに存在する個体は、まったく様々な植物らしい。これから、既にバッケバーク氏の時代に、本当の *G.hossei* の姿がぼやけてしまい、種々様々なタイプ(種)が、同じ名前で流通していた事が分かる。日本が、ドイツから *G.hossei* を輸入したとすれば、この混乱は当然持ち込まれたはずである。その中には、和名「五大州」と呼ばれる植物も存在していたのだろう。外国語の文献で *G.hossei* とは、どのようなものか確かめる人も手段もなかったので、混乱した状態のまま日本国内に流通したと考えられる。

バッケバーク氏は、こんな事も書いている “ホセアス(*Hosseus*)氏は以下のことを指摘した。ハー



ゲのカタログ 1927.15 の中に規準標本種の写真が載っている、隣に載せられた写真、すなわち実生苗は、非常に似ていない。”

これは、ハーゲが *G.hossei* として販売した苗は既に、異なる種との交配による実生苗だった可能性もあり。これが本来の *G.hossei* でないものが流通した一因かもしれない。

右; *Die Cactaceae* III・図 1669、左; *Cactus Lexicon* の *G.hossei*

“*Die Cactaceae* III” には

図 1669 としてアンドリー(*Andreae*)氏のコレクションから撮られた写真が載せられている。バッケバーク氏は、写真の苗はベルガー氏の学術描写に適合していると言いつけているが、これはプットナム(*Putnam*)氏の所でも述べたように、ハーゲ(*Walther Haage*)氏から違うものだと指摘されている。確かに刺は、中刺を含めて7本以下ではあるが、“刺が放射状に出て、幾分少し後方に曲がる” という描写に対して、殆ど直ぐに、後方に曲り、胴体に沿っている。

一方 1966 年に初版が発行され、後に英語で出版された “*Cactus Lexicon*” は、1976 年に改訂されたドイツ語版の訳である。これは初版に比べ、1966 年から 1973 年までに記載された新種が、ハーゲ(*Walther Haage*)氏により補われている。この本で分かる事は、*Die Cactaceae* III とほぼ同じ学術描写であるが、違いは花の色が濃いピンク色となっている。これは最初のベルガー氏の淡いピンク色の描写や “*Die Cactaceae* III” の描写とは異なるが、花色の変異は許容範囲と思われる。この本で採用された写真 136 は輸入球で、扁平な球形で、まだ小さくて9稜、幅広の稜は、描写に一致するが、刺の数が少なく、写真に添えられたコメントでは、違う種かもしれないと書かれている。

この二つの文献で、バッケバーク氏は、“*Not. Cact. Arg.*”の図版 V、写真5の左のホセアス(*Hosseus*)氏の写真に載った植物で、乱暴に刺が出た植物は、低地に *G.bodenbenderianum* と一緒に生えている基本種とは違い、高度 2000m に生えている変種 *longispinum* (*He jr.*)*Hort* とする一方で、この種は *G.hossei* とは異なる種と考えていた節がある。この変種は、ティル(*H.Till*)氏によれば、*G.castellanosii* により近い種で、*G.coloradense* *F.Berger* として、最近記述された種であるとされている。その後 1956 年にクラインツ(*Kreinzi*)氏の “*Kakteen*” が出ているが、その中には *G.hossei* の名前が見られない。この頃に、*G.hossei* は *G.mazanense* や *G.nidulans*、*G.weissianum* の異名

と考えられ、考慮の対象から外れたのかもしれない。

1976年から1977年にかけて、Cactus & Succulent Journal (US)に連載された、フランク氏 (Gerhart Frank) のギムノカリキュームに関する一連の論文では、G.hossei については一言も触れられていない。恐らく、問題の多い種で、解説が難しくあえて避けたと思われる。

1987年、後にメツチング(Metzing)博士等の文献で触れられている、ティル氏父子 (Hans Till 氏と Walter Till 博士) による、雑誌 Gymnos 4(8): 79-85, 1987 に載った論文 “Gymnocalycium mazanense –ein “nomen dubium?” (“ギムノカリキューム・マザネンセー “疑わしい名前”?)” では、G.mazanense を含む類縁の種について考察し、G.hossei グループと G.nigriareolatum に分割した。

この論文の中で葯の色に注目し、G.mazanense は黄色の葯であるのに対し、ハーゲ(W.Haage)氏の所にある元来の G.hossei を調査し、またティル(H.Till 氏)が、所有するドイツ、ダーレム植物園にある元来の個体の側芽とも比較した。ハーゲ(W.Haage)氏からの連絡では、植物園の個体はハーゲ氏がウェルデルマン(Werdermann)氏のために持参した物で、ティル氏の物は本物であると保証した。それらの葯は赤色で明らかに G.mazanense との違いがある。そこで著者は、Echinocactus hossei には信頼できる資料が在ると考え、基礎異名を Echinocactus hossei として Gymnocalycium hossei を標本化した。そして葯の赤い仲間、G.weissianum、G.weissianum var. cinerascense、G.weissianum var. atrorosem、そして G.mazanaese の変種とされている breviflorum と ferox さらには G.nidulans、G.rhodantherum、G.guanchinense、G.ambatoense、G.ferrari、G.alboareolatum、G.guanchinense、G.ritterianum を G.hossei 類縁グループとした。この論文では Gymnocalycium mazanense の標本化が疑わしいと主張している。その後この考えを発展させて、新しい分類が、後の論文に発表される。

1990年に初刊され、1994年改訂された、Rod & Ken Preston-Mafham 氏の本 “Cacti The Ilustrater Dictionary”には G.hossei は記載されていない。1995年に発行された、D.Metzing、M.Mellegalli、R.Kiesling 氏達の “An annotated checklist of the genus Gymnocalycium Pfeiffer ex Mittler (Cactaceae) Allionia 33: 181-228, 1995” では G.hossei は以下のように記述されている。

“**Gymnocalycium hossei (F.Haage) A.W.Hill** Index Kewensis Plantarum Phanerogamarum, Suppl. 8: 105, 1933 Basionym Echinocactus hossei F.Haage 1927.

Echinocactus hossei F.Haage, Erfurt の Fa.Haage(ハーゲ商会)のカタログ: 14-15.1927 注記として以下の事が記載されている。: Till & Till (1987)氏達は最初の挿絵を再生して (これは地理的に由来の不明な植物を描写している。)、この種と関連する種を改訂した。しかし、ハーゲの名前は標本化しなかった(?)。彼らの解釈は、以下の著者達により受け入れられた。(例えば Lambert,1993a)、種の、種レベル以下のなおも未解決の分類を考慮して、この名前を標本化する事は望ましいだろう。しかし、これには由来が既知の資料が必要であるだろう。“



G.hossei ex Haage Piltz 種子 2545
本来の G.hossei? 谷山宰氏栽培・撮影

ここで初めて、He.jr.が F.Haage 氏と記載されている。これはプットナム(Putnam)氏の記述と異なっている。また追記載者がベルガー氏でなく、ヒル(A.W.Hill)氏に変更されている。記載の古さからするとベルガー氏の方が古いので、変更理由が明確でない、おそらくベルガー氏の記述が、産地コルドバと書かれている事と写真あるいは挿絵が欠けているのが原因かもしれない。ヒル(A.W.Hill)氏の文献が手元に無いので、これ以上の事は良く分からない。

1995 年発行のピルビウム(John Pilbem)氏の本 “Gymnocalycium A collector’s Guide” では G.hossei は採用されている。本では以下のように記載されている。

G.hossei (*Haage jr.*) Berger, Kakteen 226 (1229); Haage jr. Katalog 15(1927) as Echinocactus hossei 以下、G.hossei を取り上げた文献とその著者の一覧が記載されている。

属内の分類に関しては

シュッツ(Schütz)氏の分類では亜属 Microsemineum、節 Mazanensia、Buxbaum 氏の分類では列 Mostina と記載している。その後には彼の以下の様なコメントが加えられている。

“この種は、今ではメッチング(Metzing)博士により異名 G.mazanense、G.nidulans、G.weissianum 及びそれらの種の変種、さらには G.guanchinense に対する、先行する名前と見なされている。しかしこの種に対する確実な決定は、あるいは、実際に G.mazanense の基準標本は、最初の学術記載から時間的に隔たりがあるので、今では困難である。このような事が証明されるのかについては分からない。メッチング氏が考えているものだとすると、刺の状態は極めて変化に富む種である。”彼は G.hossei に G.mazanense や G.weissianum、G.nidulans など全体を包含する考え方に、刺の出方から見て多少疑問を抱いていたように思える。彼の依拠した、文献は多少古いと思われる。メッチング(Metzing)博士のその頃の最新の見解では、G.hossei と G.mazanense や G.nidulans は区別して独立した種と見なしているからである。彼の学術描写も、異名とされたものを包含して描写しているため、多少変異の幅が広がっている。

2001 年発行のアンダーソン(E.F.Anderson)博士 “The Cactus Family” には G.hossei は採用されて以下のように記載されている。

“*Gymnocalycium hossei* (F.Haage) A.W.Hill 1933

Echinocactus hossei F.Haage 1927

Echinocactus mazanensis Backeberg 1932, *Gymnocalycium mazanense* (Backeberg) Backeberg

Echinocactus rhodantherus Boedeker 1934, *Gymnocalycium rhodantherum* (Boedeker) Backeberg 1936 not valid published

Gymnocalycium nidulans Fric ex Backeberg 1936

Gymnocalycium weissianum Backeberg 1936

Gymnocalycium guanchinense Schütz 1937

この植物は通常、単幹、扁平な球形から球形、光沢の無い灰緑色から茶緑色、高さ 9cm まで、直径 14cm まで、稜は 13 個から 19 個、かなり幅が広い、中刺は 1 本、茶色年数が経過すると灰色、縁刺は 7 本から 9 本、広がる、後方に曲る、1 本は下方を指し、残りは径方向に向く、暗い先端を持ち灰色に変わる。長さ 1.5cm まで、花は赤っぽいピンクから白っぽいピンク色まで、時に茶色を帯びる事もある、短い花筒部、自生地はアルゼンチン、ラ・リオハとカタマルカ “となっている、初記載者は 1927 年 F.Haage 氏となっている、追加記載者と記載年は A.W.Hill 氏で 1933 年になる。アンダーソン氏の立場は記載の内容から、G.mazanense、G.rhodantherum、G.nidulans、G.weissianum、

G.guanchinense など外観の良く似た植物の総称という立場で、そのため描写内容も、変異の幅が増えている。カラー写真が掲載されているが、*G.hossei* というよりも *G.marsoneri* を想起させるような写真である。ちなみに *G.marsoneri* で載せられている写真は明らかに *G.pflanzii* 系の写真で、掲載写真は、相当混乱しているように思われる。

2001年、雑誌 *Gymnocalycium* 14(2) にオーストリアのハンス・ティル氏がギムノカリキウム属の新しい分類を発表した。従来はチェコのフリック (Fric) 氏に始まり、シュッツ (B.Schütz) 博士により集大成された、種子形状に基づく分類であった。ティル氏は種子形状に加えて、果実の比較と分布地域の中心を考慮に入れた。この結果 2 つの主要グループ(亜属)に分かれる。第一のグループ (*Gymnocalycium* 亜属) は乾燥した果実で壊れ易い。分布の中心は Sierra de Cordoba と Sierra de San Luis の山脈にある。第二のグループ (*Microsemineum* 亜属) の果実は水分が多く、完熟後は融解する。その分布の中心は二つあり、北西アルゼンチンとボリビアのアンデス山地の地域と Gran Chaco の東の縁から南ブラジルを越えてウルグアイ後方までにある。*Gymnocalycium hossei* は第二の亜属の節 *Microsemineum* に所属する。更に細かい分類では列 *Mazanensia* に含まれ、その列の標準種(type)が *G.hossei* としている。

その後、この分類の考え方に基づき、多くの種が再検討されていった。*G.hossei* 類縁種に関しては、2004年の *Gymnocalycium* 17(3) から 2005年の 18(1) までに載った 5 つの論文で、比較的分離が簡単な種だけを取り上げ議論して、*G.rhodantherum* の仲間として、葯の赤い種、*G.rhodantherum*、*G.weissianum*、*G.guanchinense*、*G.ritterianum*、*G.alboareolatum* を取り上げているが、*G.mazanense* や *G.nidulans*、*G.hossei* は取り上げられなかった。以前ティル氏父子により行われた赤い葯によれば *G.rhodantherum* の仲間とする考え方は、再検討が必要で、まだ発表できる段階になかったと想像される。この時点では *G.hossei* に関する公式の見解は出ていない。



New Cactus Lexicon の *G.hossei*

2006年発行されたハント (David Hunt) 博士らの NCL (New Cactus Lexicon) では種名として採用されている。*G.hossei* (*Hge.F.*) Hill 1933/ IKS 8: 105: B: 04760 *Echinocactus hossei* *Hge.F.* 1927/ Kat. 14-15 T: AR. Cordoba, nd. Distr.: AR.(Cordoba、La Rioja) 初記載者は F.Haage 氏で、追加記載は A.W.Hill(ed.) (1933) *Index Kewensis, Supp* としている。規準標本はコルドバとしているが、申告されていないと記載している。分布はアルゼンチンのコルドバとラ・リオハしている点は注目される。

現在ではバックバーク氏(C.Backeberg)により相次いで、命名された、*G.mazanense* (和名魔天竜)、*G.nidulans*(猛鷲玉)、*G.weissianum* (華武者) 及び、それらの変種を包含すると考えられているというコメントが付けられている。学術描写は以下のようになっている。

“胴体は押し潰された球形、暗い青緑色、稜は 13 個、幅広で、瘤隆起がある、瘤の間には横溝が走る、刺座は長さ 5mm から 6mm で 10mm から 14mm 離れている。刺は通常 7 本、幾分反り返る、突き錐形状かあるいは幾分平坦になっている、最初は茶色、最下部の刺は 14mm 以下、花は花筒部が短い、花弁は濃いピンク色。果実は不明。”

2008年12月の雑誌 *Gymnocalycium* の2008特別号として、ティル氏父子に、アンメルハウザー (H.Amerhauser)氏を加えた著者達が、2001年のティル氏の分類の改訂版を発表した。2001年以降に発表された新種や、得られた新しい知見を取り入れるための改訂であった。その新しい分類体系では、*G.hossei* の取り扱いは以下のようになる。

亜属 *Microsemineum*、節 *Saglione*、亜節 *Microsemineum*、列 *Mostiana* と細分され、*Mostina* 列の下に亜列ではなくて、集合と言う分類項目になり、集合 *Mostina*、集合 *Hosseiiana*、集合 *Oenanthema*、集合 *Rhodanthera*、集合 *Spegazzinia* がある。集合 *Hosseiiana* に *G.hossei* は所属している。

集合 (Aggregata) *Rhodanthera* に入っている物は *G.guanchinense*、*G.jochumi*、とその変種 *jugum*、*G.alboareolatum*、*G.alboareolatum* v. *ramosum*、*G.rhodantherum*、*G.ritterianum*、*G.weissianum*、*G.weissianum* v. *atroroseum*、*G.weissianum* v. *cinerascens* で基本的には2004年から2005年に議論された内容から変化は無い。

集合 *Hosseiiana* の分類の考え方について2008年12月段階では詳細は述べられていないが、付属している、種名のリストからは、*G.ferrari*、*G.hossei* (= *G.pugionacanthum*、*G.mazanense*、*G.mazanense* var. *breviflorum*、*G.mazanense* var. *roseiflorum*) とその変種 *G.hossei* var. *nidulans* (= *G.nidulans*)、*G.hossei* var. *breviflorum* (= *G.mazanense* var. *breviflorum*) が含まれていることが分かる。

特別号の短い記事では、“*Sierra de Velasco* と *Sierra de Ambato* の間に存在する *Sierra de Mazan* 及び、先に述べた二つの *Sierra* の間の低地には、非常に変化に富む *G.hossei* が存在する。これらの中で若干のものは、*G.mazanense* や *G.nidulans* と *G.pugionacanthum* など、独立した種として学術記載された。生息地での知見や、栽培での観察から、上で挙げた三つの種は *G.hossei* の変種として評価される。”と記載されている。

最後に、ヨーロッパの文献を中心に *G.hossei* の姿を調べてきましたが、我々には情報が手に入りにくい、ギムノカリキウムの研究や栽培では古い伝統を持つアルゼンチンとチェコの情報を、英語で記載された資料を元に記載しておく。最初はアルゼンチンの情報で、ギムノカリキウム等の南米種の研究では、ヨーロッパと比肩する成果を挙げている、ダーウィン研究所のキースリング博士氏 (R.Kiesling) 達の見解を、彼が出版したアルゼンチンの維管束植物のカタログ (*Catalogo de las Plantas Vasculares de la Argentina*) から調べてみる。

Echinocactus hossei *F.Haage* = [*Gymnocalycium hossei* (*F.Haage*) *A.W.Hill*]

Echinocactus rhodantherus *Boed.* = [*Gymnocalycium rhodantherum* (*Boed.*) *Backbg.*]

Echinocactus mazanensis *Backbg.* = *Gymnocalycium mazanense* *Backbg.*

[*Gymnocalycium hossei* (*F.Haage*) *A.W.Hill*] Synonym *Echinocactus hossei* *F.Haage*

註釈：はっきりしない分類学種 (Taxon dudoso)

Gymnocalycium mazanense (*Backbg.*) *Backbg.* = *Echinocactus mazanensis* *Backbg.*

異名：*G.mazanense* var. *breviflorum* *Backebg.*、*G.mazanense* var. *ferox* *Backbg.*、*G.nidulans* *Backbg.*、*G.weissianum* *Backbg.*、*G.weissianum* var. *atroroseum* *Backbg.* nom.inval.、*G.weissianum* var. *cinerscens* *Backbg.* nom. inval.

Gymnocalycium pugionacanthum *Backbg.* ex *H.Till*

異名 *G.catamarcense* *H.Till & W.Till* とそれらの変種及び品種

[*Gymnocalycium rhodantherum* (Boed.) Backbg. = *Echinocactus rhodantherus* Boed.]

と言う表記をおこなっているのが、ハンス・ティル氏を含むオーストリア、そしてハント氏達の英国の研究者達とも異なる特異な見解を持っている。遺伝子情報による分類と異なり、現在主流の外観による分類は、主観が入るため人により異なる事は避けがたいと思われます。*G.hossei* は疑わしい種として認めていません、また *G.rhodantherum* も同じ扱いです。彼らがヨーロッパの古い文献をどれだけ研究しているかは分かりませんが、個人的な感想では、多少情報不足の感も伺える。

次に、チェコの情報であるが、カクタスの雑誌も発行されているが、チェコ語がマイナーなために、良く理解されていない。最近ミルト(Ivan Milt)氏が自分のホームページに英語で記述したギムノカリキュム属の解説があるので、そこから *G.hossei* の部分を引用してみたい。

“1927年、エルフルトのハーゲ商会 (firma Hagge jr.) によって販売された、大量の輸入植物の委託貨物であった。多量の種子は 1000 粒単位で提供された、しかしコレクションの大半は第二次世界大戦の間に破壊された。その結果この分類学種は殆ど失われた。シュッツ博士に拠れば、新しい刺はピンク色の混ざった茶色であるはずである。彼もまた、最初の輸入植物を手に入れて、育てていた。そして *Gymn.hossei* type として増やした。オーストリアのカクタス愛好家の発見物は、それに合致する。*Gymn.hossei* STO 237、青い果実、そして不正確に命名された *Gymn.pugionacanthum* STO 238 Mazan(現在は、*G.hossei* の Field 番号としている。)、これらの植物は独特の刺色、ピンクの花、そして青い果実を持つ。我々は文献中にこの分類学種の間違った写真を見ることが出来る。それらのいくつかは *G.baldianum* にさえ似ている(Backeberg の *Cactaceae* III のことを言っている。)、*Gymn. hossei* var. *longispinum*、*G.hossei* var. *brevispinum* の名前に関して多数の植物が存在する。しかし、それらは *G.hossei* とは全く関係が無い、*Gymn.nidulans* あるいは *Gymn.mazanense* にさえより近い。”

彼の記載内容全体から、同国人のシュッツ博士に心酔し、最新のティル氏による分類には反対し、シュッツ博士による古い分類に固執しているように思えるが、傾聴に値する興味深い見解ももっている。

まとめ

手に入る文献を下に、*G.hossei* の本来の姿を探しての調査を行いました。自生地はアルゼンチンのラ・リオハ州であること、それ以上の詳細な産地情報は無い、コルドバ州は間違いである。胴体は比較的扁平な球形で、肌色は光沢の無い灰緑色の可能性が高い。刺座は縦長で、刺座には白色から灰色の綿毛がある。刺座あたりの刺数は、大抵中刺を含め 7 本、中刺は遅くなって出る事もある。刺色は初め茶色、後に先端が暗色で灰色、刺の出方は放射状に広がり、後方に反り返る。花首は短く、花弁は淡いピンク色から濃いピンク色まで、葯は H.Till 氏によると最初の輸入植物に基づき、赤色、青い果実、しかし種子の情報は無い。

最新の結論は、*G.hossei* は独立した分類学種と考えるべきで、*G.mazanense* や *G.nidulans* 他の、必ずしも異名では無い。*G.mazanense* や *G.nidulans* を独立種と考えるか、*G.hossei* の変種、又は品種として考えるかは、分類学者の見解も異なるので、ここでは、良く分からないとしたい。

これらの情報と、文末や文中に添えられた写真との比較で、どの植物が、最初の学術描写に近いかは、読者の判断に任せます。

参考文献

- A.Berger : Kakteen 1929
H.Krainz : Die Kakteen 1956
C.Backberg : Die Cactaceae III 1959
C.Backberg : Cactus Lexicon 1977 (註)初版は 1966 年に発行されている。英語版 1977(1976 年発行のドイツ語版を元にして、それは 1966 年の原版に比べて Walther Haage 氏により、1966 年から 1973 年までの新種が記載されている)G.hossei に関しては新種では無いので、初版と同じ。
G.Frank : Cactus & Succulent Journal (US) 1976 - 1977
E.W. Putnum : Gymnocalycium 1978
H.Till & W.Till : “Gymnocalycium mazanense –ein “nomen dubium”?” “Gymnos 4(8): 79-85, 1987
Rod & Ken : Preston-Mafham Cacti The Illustrated Dictionary 1994
D.Metzing, M.Meregalli & R.Kiesling : An annotated checklist of the genus Gymnocalycium Pfeiffer ex Mittler (Cactaceae) Allionia 33: 161- 228, 1995
J.Pilbeam : Gymnocalycium A collector’s Guide 1995
E.F.Anderson : The Cactus Family 2000
H.Till : Gymnocalycium 17(3) 2004 ; 579-584
H.Till : Gymnocalycium 17(3) 2004 ; 585-588
H.Till : Gymnocalycium 19(2) 2006: 663-670
D.Hunt (ed) : New Cactus Lexicon 2006
R.Kiesling : Instituto de Botanica Darwinion 2007 Web Page
Ivan Milt : Olomouc Cactus Club 2008 Web Page
H.Till,H.Amerhauser & W.Till : Gymnocalycium Sonderausgabe 2008 : 815-838

この冊子を作成するに当たり、本文を読み、コメントと写真を提供していただいた島田孝氏、写真を提供していただいた谷山宰氏に感謝します。

付録 1 : G.hossei に関連する写真



左:古曾部五大州(谷山 宰氏撮影)、中:正伝五大州(谷山 宰氏撮影)、右:G.sp.Valida(島田 孝氏撮影)、いずれも G.catamarcense(G.hybopleurum)類縁種と推定される。



左:芳明園からの *G.hossei*(谷山 幸氏撮影)、中:昔の Uhlig 種子の *G.hossei*(島田 孝氏撮影)、
右:五十鈴園からの *G.hossei*(筆者栽培・撮影)いずれも *G.hossei* では無いと思われる。



左:*G.hossei* P139 (Carrizal, La Rioja)Piltz Plant(筆者栽培・撮影)、中:*G.weissianum*= *G.hossei* L485(Mazan, La Rioja) Uhlig Plant(島田 孝氏撮影)、右:*G.mazanense* BKS122a/2(By Anillaco, La Rioja) Haage Plant(島田 孝氏撮影)。いずれも、*G.hossei* の産地とされる近郊からの植物であるが、本来の *G.hossei* か、その近縁種かどうかは、不明。



左:*G.mazanense* v. *ferox* P30A (Cuesta de Sebila, La Rioja)Mesa 種子(島田 孝氏撮影)、中:
G.mazanense v. P30B(Cuesta de Sebila, La Rioja) (谷山 幸氏撮影)、右:*G. weissianum* ISI 1705 (Cuestada Mivambe, La Rioja)Mesa 種子(谷山 幸氏撮影)。いずれも、*G.hossei* の産地とされる近郊からの植物であるが、本来の *G.hossei* か、その近縁種かどうかは、不明